

實驗上の育兒(つゞき)

醫學博士 瀬川昌著

智慧付

▲歩行の時期 哺乳兒が首を據げられるやうになり、手足を突張つて後へ〜と居る様になると、是が抑も前へ這出す兆と承知するが宜い、後方へ居去つてから前へ這出すのは發育上の順序である七八ヶ月目になると、何うやら座られるが、夫から二三ヶ月経つて、即ち生後十ヶ月か十一ヶ月には、障子などへ捉まつては危氣ながらも立上つて、臀を突いても亦輿に浮れて立上る、トウ〜夫れから手放して歩けるやうになるが實に哺乳兒の成長は早いもので此時は生れて一年内外です。

▲投遣つて置け 總て身体の發育上から言ふと、餘り愛撫がり過ぎて、抱いたりかゝへたり、ちや

●はやすると却つて夫れが發育の障礙となつて、歩くのも自然遅くなる順序となる、故に人手の多い家族や老人達のある家の哺乳兒は下へも置かぬ育てかたをするので歩くのも遅くなる譯、却つて人手の少なき家族は投遣つて置くから哺乳兒は自分勝手に色々行つて見て、歩く事の智識も早く付く是は即ち身体發育が善良なるからである。

▲はん肥りでない 歩行と云ふ事は哺乳兒によつて色々調子の異なるもの、健康な兒でも遅く歩出す事もある、又生後一年半位でも歩けぬ兒もゐるのです、一体肥満た兒は丈夫さうに見えるが、余り肥り過ぎるのも宜しくない、之は營養の仕方が間違つて居る、所謂「はん肥り」でないから肥り過ぎて健康でない事と用心するのが大切です。

▲視線の固定 以上は身体の發育状態であるが、

尙續いて精神上の發育狀態を説明いたさう、初生兒の生れたときは必ず室内を薄暗くして置くべきもので、明るい處は大層嫌うのです、生れて四五週間目までは視官が充分發育して居らぬから物を凝視する事が出来ない、視線は固定せずにチラチラ動いて居るのであるが、併し生後二三週間経てば漸次明かるとい方を見て、明かるとい方を好むやうになつて來ます、四五週間の後になると視官の發育も盛んになつて、ジーツと人を見詰るやうになる、であるから一二ヶ月経つても、物を見詰る事の出來ぬのは腦に故障のあるので早く其の手當をするやう御注意いたして置きます、斯ういふ事は經驗なき母親は油断なく舉動に注意し居る積りで、も餘り氣の付かぬもので折々手拔りのある事は是迄屢々實見致しました。次第に月を重ねて七八ヶ

月目から人を識別する智識を備へ、父母の顔も知るやうになり、自分を愛するのは何の人であつたかと云ふ事も知つて來る、故に人見知りして知らぬ人だと顔を背けたり、泣出したりするのも此時からです。

聴覺と發語

▲大きな音を忌む 生兒の生れた當時は視線も固定せず、聴官の發育も完全して居らぬ、生れて一日二日は聴覺のないもので即ち構造が未だ充分になつて居らぬのです、去れども夫れはホンの僅の間で直に構造は完全に改まつて能く聞えるやうになります、聞えて來るやうになるとナカク穎敏なもので、哺乳兒時代には一寸した音響でも大層強く激く感ずるのは即ち耳の穎敏な證據である、夫れ故此時代の兒の四邊では餘り大きな音をした

り、強い響きを感じるやうなことは避けなければならぬのです、親達や家族の者が高い音をせないでも他働的強い音を受ける事がある、随分開んな場合には痙攣る哺乳兒を數々見受けるから氣を注けて遣らなければならぬ、夏でも雷の鳴る時、烈しくなつて來たら、寢せて置かずに、抱上げて遣り、成丈け其の響きの低く聞ゆるやうに、耳を塞いで注意を與へないと非常に雷鳴に恐怖る事がある、其外閑静な所に居慣れた哺乳兒が急に汽笛の音に驚くとか、總て俄に高い響きのするものに接近したときなど耳を庇護して遣る事が大切でありませす。

▲聲を識別す 聴官の健康に、安全に發達する哺乳兒は生後五六ヶ月の頃になると、音響の孰れの方から來たものか何處で自分を呼んだのか、又

聞き慣れた人の聲か、聞き覚えのない聲かを識別し得るやうになる、であるから兒の名を呼ぶと其の兒は聲を懸けた人の方を振返つて見るやうになる、夫れから九ヶ月目か十ヶ月目になると廻らぬ舌で、不完全な發語をする、追々と日増しに言葉や、物真似をするやうになるし、舉動の上に、其の眞似が顯はれて段々と上手になり、進歩して來るのです

▲發語と周圍の關係 故に此時分は善い事、悪い事、唯無闇に眞似をするのであるから、哺乳兒の周圍の關係に充分氣を注ける事は親達の大切な任務であります、野卑な、下品な眞似をする兒は矢張り其の周圍の關係が卑しいからであります。又周圍の關係は、發育上に大なる影響を及ぼすもので、自然に哺乳兒が見覺えるとか、聞習ふのな

ら差支へないが他から干渉して色々の事を教えるは、至極宜しくないが、兒によつて一年から二年の終りになつても能く口の利けぬ兒がある、爾うすると親達は非常に之れを苦に惱み「他の兒は此の兒より遅く生れたけれど、モ一口を利けるのに、何うして此の兒は能く口が利けないのだらう」と心配するが、口を利く時期が遅いからと云つて他の部分さへ完全に發育して居れば一向差支へない事で、只遅速のある計りと思ひ其内には能く口を利くやうになつて來ます。

精神の發育を害す

▲無理に教えるな 哺乳兒が智慧の付くやうになり、言語に、舉動に物真似をする事は周圍の關係が大なる影響を及ぼす事は前に述べた通りであるが、親達の情として兎角我が兒の早き智慧付きを

喜び、況して祖父母のある家では尙ほさら、色々の事を教えます、成程教えれば哺乳兒も夫れを見覚え、聽覺にて、教えられた様に真似をするが、切斯ういふ風にして哺乳兒の精神を發達させる事は、果して其の兒の爲め利益な事であらうか、何うかと云ふに、是は至極悪いことで、精神上の發育に非常な不利益を與へるのです。

▲精神を刺戟す 一体哺乳兒の智慧付きが他の哺乳兒に比べて遅いからとて決して、夫れを氣遣かぶ事はない、他の哺乳兒は「お頭てん〜」が出來るとか「かア〜」とか「わん〜」とか鳥や動物の鳴き真似が出来るのに自分の兒はナゼ斯う智慧付が遅いだらうと、親達や祖父母達は心配して頻りに教え込む、覺えないと無理に叱るやうにして教えるが、頑是なき哺乳兒に無理に教えた

こゝで何の効が有りませう、尤も周囲の關係上教  
えれば必ず智慧付の早いものだが、之れが我が愛  
兒の不爲になる事と悟つたら、無理に智慧を付け  
させ無理に精神を發達させるにも及ぶまい、此弊  
害は哺乳兒の精神を刺戟して發育を害ふから特に  
御注意申すのです、世間には必ず斯ういふ弊風を  
悟る方も澤山ある事と信じます。

▲哺乳兒の自由に任せよ 總て哺乳兒には餓れば  
乳を與へ、又た兩便の爲め襁褓が濡れば夫を取換  
へてやる、夫れ丈の世話を欠さずに置けば澤山な  
ものです、無邪氣な哺乳兒に爾う世話を焼かずと  
も一定の時期さへ來れば智慧も付いて來るし、口  
眞似もすれば、物眞似もするやうになるから、成  
丈け干渉せずに哺乳兒の自由に任せて置くが宜い  
之が保育の善良なる方法である。

▲健康なる哺乳兒の大便 次には健康なる哺乳兒  
の大小便に就ては咄致さう大小便の注意は親達の  
極く大切なことと之に依つて哺乳兒の病氣を發見  
することも出来るし、病氣の手當を機敏にするこ  
とも出来る、此大切な注意を要する大小便は生  
後何んな状態に進むものかと云ふに先づ大便は前  
に初生兒時代の取扱法で述べて置いた通り生兒  
の大便は黄色で、柔かて回数も多いが、日を經、  
月を重ねるに従ひ夫れが堅目になつて、水氣も少  
なくなつて、回数を減じて來る、之れは即ち乳汁  
の關係であるが、茲に念の爲め咄して置きたいの  
は母乳で育てる兒と、牛乳で育てる兒とは大便の  
性質が違ふ事です何んな鹽梅に違ふ者か夫は次に  
申上げやう。(續く)